

東京学芸大学・先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット 2025
オンライン研修「多様性が生きることばの教育 2025」 報告

趣旨

子どもたちの多様性が生きることばの教育をテーマに、2種類の研修を行う。文化間移動をした子どもたちが、その多様性や出身国・地域等での経験を活かし、学級・学校・地域社会の一員としてその力を発揮できることばの教育を受講者とともに構想する。新たな視点とアイデアで、学びの場・内容と活動、そして支援のあり方を議論し、かれらをエンパワーメントすることばの教育を具体的に検討する。

研修Aでは、高等学校における日本語学習支援に関して環境づくりという視点から捉え直して学ぶ。研修Bでは、子どもたちが成長・発達を十全に送るための教育のシステムを考えるために、幼・小・中・高での学習の連続性を意識したことばの教育について検討する。両研修とも、テーマに関連する情報の提供（講義）・現場の取り組み実践例・参加者間の交流／ワークショップで構成する。

研修A「多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり」

＜ねらい＞

高等学校において「特別の教育課程」による日本語指導の制度化が施行されて3年目を迎えた。外国人生徒等が、共生社会の一員として自己を実現するためにも、この制度を利用して日本語指導の充実を図りつつ、その学習を教科学習、キャリア形成、社会的活動への参加等に関連付けて、自己を開拓するための力を育むことが期待される。

研修Aでは、多様な言語的文化的背景をもつ生徒たちが自分の未来を切り開き、社会参画するためのことばの教育・支援を検討する。それには生徒自身が、自分がもつ潜在的な力に気づき、さらにその力を能力として開拓できる、つまりかれらをエンパワーメントすることが重要である。本研修では「日本語指導」を、外国人生徒等が、その多様性を活かして主体的に参加し、新たな価値を創造する「ことばの学習」のための「学習環境のデザイン」という視点で捉えなおす。学習環境を、「活動」「人工物（教材・教具等のリソース）」「コミュニティ（共同体）」の3つの側面からいかにデザインするか、事例や現場の取り組みをもとに具体的に学ぶ。

1 研修A 報告

(1) 第3回研修 概要

日時	2025年8月3日（日）10:00 - 12:30
主たる受講者（対象）	高校で学ぶ外国人生徒等、および高校生相当年齢の子どもに日本語指導・学習支援等の支援を実施している教師・支援者等
テーマ	「ことばの学習のリソース」をデザインするー学習環境の視点から
ねらいとする資質・能力※	＜捉える力＞ キ 子どもたちの暮らしを地域の多文化化や外国人住民支援の状況に関連付けて把握することができる。 ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。

	<育む力> サ 子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。 <変える力> ハ 外国人児童生徒等が地域にもたらす影響を多様性として肯定的にとらえられるように、マジョリティである受け入れ側に働きかけることができる。
研修内容	1 学習環境デザインの考え方で、目標を共有する人々の繋がりや、主体的参加によって構成されるコミュニティ（共同体）を取り上げて検討する。どこで誰とどのような目標で、どのような活動に参加する経験が、社会的存在として自己を実現するために学び続ける主体性と自律性を涵養するのか、学校・地域コミュニティ・エスニックコミュニティ等、様々な可能性をともに考える 2 「特別の教育課程」による日本語指導を実施している兵庫県立湊川高等学校が、具体的な指導体制や指導内容について報告する。
事前学習課題（参加に当たって）	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）『高等学校における日本語指導の制度化 「特別の教育課程」としての編成・実施について』 <1> 基本的な考え方と制度の解説 <2> 「特別の教育課程」として日本語指導の編成・実施のポイント <3> 高等学校における日本語指導の現状と課題

※文部科学省 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）にもとづく

(2) 研修 A 第3回 実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	・研修趣旨のスライド資料
②講義「高校生にとっての社会的学習環境（コミュニティ）」	・コンピテンシー ・向社会性・ソーシャルスキル ・社会関係資本	参考文献： ・国立教育政策研究(2017) ・Berry(1990) ・本ユニット（2023a）「高等学校における外国人生徒等の受入れの手引」 ・本ユニット（2023b）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」
③講義「異文化適応とエスニックコミュニティ」	・異文化適応の4類型「統合」「同化」「分離」「境界化」	
④講義「社会的学習環境とキャリア形成」	・高等学校の実践例； ・クラブ活動、探究活動 ・SDGs、シティズンシップ ・放課後支援組織 ・エンパワーメントモデル	参考文献： ・宮城県国際化協会(2019) ・佐藤（2015） ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」
③事例報告		講師作成スライド

④グループワーク 「生徒が能動的に相互作用をするコミュニティについて」 ⑤振り返り	報告：湊川高等学校における「日本語指導」の取り組み 2年目の実施状況 兵庫県立湊川高等学校（定時制） 教諭 金子 大樹氏 質疑応答： 口頭で・チャットへ書き込みで 小グループで話し合い ①自己紹介一人1分（活動している場所と名前） ②生徒のコミュニティでの活動について、紹介し合う。 アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用のアイデア ・資質・能力の向上の有無	グループ活動の課題 グループワーク 11:45-12:10 (25分) 「生徒が能動的に相互作用をするコミュニティについて」 1 グループ(ランダム 5人程度)に分かれて、次の活動を行ってください。 ① 自己紹介一人1分(活動している場所と名前) ★進行とメモを取る人を決める (バドレッドにメモ) ② 生徒のコミュニティでの活動について、紹介し合う。 ✓ 生徒たちが、教室以外のどんなコミュニティで過ごしているか。 ✓ そのコミュニティの目的・目標のために、生徒は問題解決や課題遂行に主体的にかかわっているか。そこで、日本語として何を学び、多様性や持ち味をどう発揮しているのか。(具体的なエピソードをご紹介ください。) ✓ そのコミュニティ自体に、かれらの参加による変化があったか。
参考文献・資料 ・Berry, J. W. 1990 Psychology of acculturation. In RW. Brislin (Ed.), Applied Cross-cultural Psychology. Newbury Park, California: Sage. Pp. 232-253. Bochner ・国立教育政策研究所(2017)『非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』研究代表者 遠藤 利彦（国立教育政策研究所） ・本ユニット 2023 年度研修報告書 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M23_kenshu04_ogikubo2.pdf ・本ユニット（2023a）「高等学校における外国人生徒等の受入の手引」 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_tebiki.pdf ・本ユニット（2023b）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html ・宮城県国際化協会編(2019)「外国籍児童生徒サポート事例集～多文化な子どもたちの未来をひらくために～」 ・佐藤 寛 編(2005)『援助とエンパワーメント』 アジア経済研究所		

3 成果

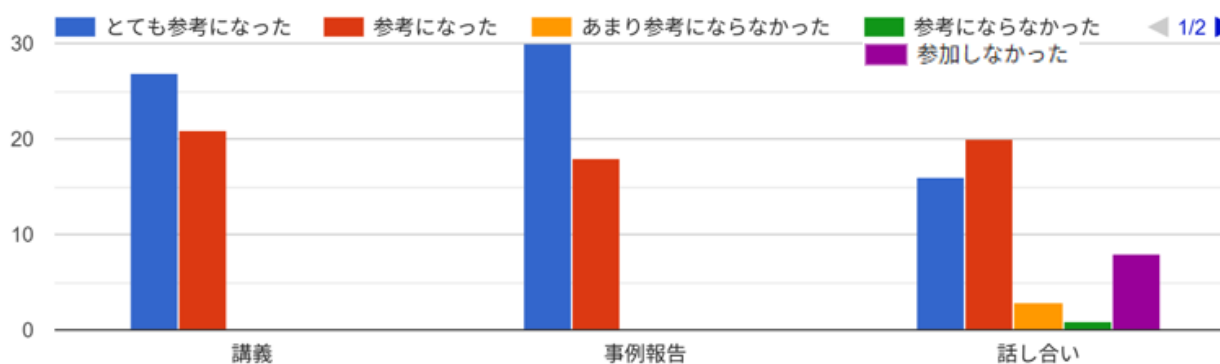
参加申し込み数：104 当日参加者数：99 アンケート協力者数：48（回収率 48.4%）

<アンケートより>

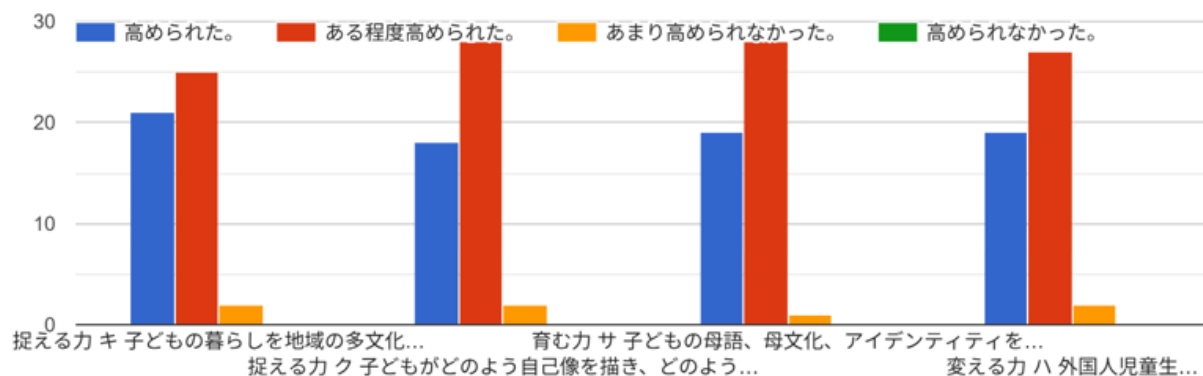
① 参加者の背景（立場）



② 満足度「参考になったか」



③ めあてとした資質・能力の向上について



④ 寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

・ 近い将来各県で実施される見込みの、外国に繋がる高校生への日本語支援の枠組みや具体的なプログラム、実施例を知る事が出来た。地域のサポーターとして、どのような伴奏者になる可能性があるかを考える大きな助けとなった。
・ 異文化適応の4タイプのうち、「統合」を望んでいる外国にルーツのある子どもたちと目指している日本語指導に関わっている人々の活動や実際を知ることができた。事例報告や話し合いでも、なかなか難しい課題であるが、研修を通して、前進する力になっていると思う。
・ ご講義の中で具体的な指導のアイディアをお話いただきとても勉強になりました。頭が硬くなっているので理念に基づいた実践の流れを教えていただきありがたかったです。また、報告者のあたたかいお人柄が溢れる受け入れ体制構築や日本語指導のための職員での共通理解など、お話をお伺いして、もう一度見直す必要があると感じました。
・ 湊川高校の実施状況を聞き、自分達ももっと活動する可能性があると感じました。非常勤で、情報を希望され、提供なら可能だとしていますが、実際の活動決定には参加できないまま、個人活動範囲での活動で過ごしてきました。このままのままでいいか、何等かの動きをかんがえようと思います。
・ 今行っている実践がいいのか批判的に捉え直すきっかけになった。
・ 前から思っていたことではありますが、自分の教室内の改善に留まっていはいけなと改めて感じました。講師の立場では難しい面もありますが、教諭の先生方に働きかけ、周囲を巻き込みながら、生徒たちの学習環境を少しずつでも改善していきたいと思います。私自身の向社会性を高めていく必要性を強く感じました。
・ 勤務校内の外国にルーツのある児童が学級内で社会参加できるように支援していきたい。今年度の日本語指導担当者に本研修で学んだことを伝えたい。そのことで、現在日本語学級に通級している児童へ間接的に伝わってほしい。

⑤ 「特別の教育課程」の実施について（高等学校所属 24 人中）

前回、回答済み	: 16 人
「特別の教育課程」を実施	: 5 人
「検討中」	: 0 人
実施は「難しい」	: 3 人

<現状について>

実施しているとの回答から

- ・ 日本語 I A をはじめとする 16 科目を、特別の教育課程として実施している。評価について、各担当による評価のばらつき、関係教員間の共有など難しさを感じている。
- ・ 一年生を対象に週一度（45 分×2 コマ）実施。他に学校選択科目としての日本語指導を週一度（45 分×2 コマ）実施

実施は「難しい」との回答から

- ・今は特別の教育課程で実施していませんが、本日の話を聞いて、例えば放課後の時間を使った自由参加の日本語学習会などの開催を、単位習得につながる特別の教育課程に位置づけていくことも効果があると感じたので、検討まではいかないかもしれないけれど、選択肢の一つとしてもっておきたいと思います。

＜企画・実施者の所感＞

第3回 学習環境としてのコミュニティのデザインがテーマであったが、グループワークでは、意見が出にくいグループとよく話せたグループがみられた。参加者の感想に「今回の研修はハードルが高い」とあったが、生徒と周囲が変容するという、日本語学習を含めた学びの本質的な目的を認識する機会となつてほしいと考える。講師の金子先生は外国籍の出身で、また、課題を抱える生徒が非常に多い高校で教えられていることが、参加者を講話に引き付ける大きな要素となったと感じる。Well-being が問われる時代にあつて、学校のすべての生徒に配慮しながら学習を進めることの大切さが認識できた。

4 資料（URL にアクセスすれば、ダウンロードできます）

- ① 講義 学習環境としてのコミュニティのデザイン～生徒の主体的な学びとキャリア形成を促すために～ 市瀬智紀 宮城教育大学
- ② 報告資料 金子大樹 兵庫県立湊川高等学校